

ペルー産ブドウ シーズン後半の出荷量は減少

FreshPlaza 2023年12月14日

ペルー産のブドウは出荷シーズンの中間点に近づいているが、多くの産地で通常のシーズンではなく、2つの主産地でもエルニーニョの影響が見られた。

北部のピウラ県では収穫が早まったため収量が約40%減少し、天候は品質にも影響を与えた。パシフィック青果会社のロバート・カラム氏は、「ペルーはブドウの品質が高いことで知られており、人々はそれに慣れている。欧州への輸出に影響を及ぼす収量の低下に加え、北米市場ではカリフォルニア州産が早期に終了したため品不足になっており、多くのブドウが送られて高い値がついている」と話す。(以下「」は同氏の発言)

南部のイカ県では、生産者は天候、特に収穫期の雨を心配していた。「大規模な生産者は雨が降る前に収穫を開始するために、早めにブドウ園の剪定を行った。これによって(前半の)供給が重複し、それはシーズン後半には生産量が減少することを意味するだろう。」

流通量が少ないためEUでも価格が上がっているが、北半球の生産者にとっても良いシーズンではなく供給量が不足しており、ブラジル産の品質も概して低い。「小売価格が上がると見られ、梱包業者のおかげで店頭での品質はどうか問題ないはずだが、棚持ちは悪くなる可能性がある。弊社ではナミビアからの最初の荷の到着を待っている。それは間近に迫っており、クリスマスの需要をカバーする。」

消費者に関しては、赤、白、黒の選択肢があれば、原産地は気にしないと同氏は考えている。「消費者は、主に好みの色のブドウを選ぶ。ただし、コットンキャンディのような特別な品種に気付き始めており、小売業者はどの品種を棚に並べるかについて、より厳選するようになってきている。」

ますます多くの生産者が知的財産権の有る新品種(IP品種)に移行しており、同氏によるとペルーはこの動きの最前線にいる。「ペルーは比較的若いブドウ産地で、気候のおかげで植栽から収穫までが非常に速いため、他の国では3年くらいかかるかも知れないことがペルーでは1年でできる。」

執筆者: ニコラ・マクレガー

EUの園芸団体は包装規制に懸念を表明

FreshPlaza 2023年12月14日

欧州園芸地域連合(AREFLH)と原産地表示製品のための欧州地域協会(AREPO)は、包装及び包装廃棄物に関する規制についてのトライアログ(欧州委員会、欧州議会及び欧州連合(EU)理事会による三者協議)の前に、EU理事会に働きかけを行う。両団体は、12月18日の環境理事会(環境大臣会合)に先立ち、12月13日にEU加盟国の農業常駐代表ら(大使級)に宛てた共同書簡で懸念を表明した。

この理事会で、出席者らは包装及び包装廃棄物に関する規制に関する提案への対応について合意する必要がある。この合意は、欧州議会とのトライアログを開始するための交渉マנדートとして機能する。

議長による調整案、特に第22条及び附属書V(パラグラフ2)を読むと、1.5kg未満の製品への使い捨て包装の禁止から果実と野菜を免除する可能性は、特に品質に関する文脈において、完全に排除されたわけではない。

AREFLHとAREPOは、この附属書の文言を欧州議会の文言と一致させるよう求めている。欧州議会の文言は、原産地呼称保護(PDO)と地理的表示保護(PGI)の認定を受けた果実と野菜の免除を明示的に示していることから、両団体は(そちらの方が)より包括的で安心できると考えている。